第三十九回

2009 都民芸術フェスティバル助成公演

邦楽演奏会

―邦楽名曲選―

平成二十一年三月一日（日）　国立劇場小劇場

第一部　十二時開演　三時三十分終演

第二部　午後四時開演　七時三十分終演

主催

邦楽連合会

社団法人 義太夫協会
中央区築地一―十二―十六―三F
電話三五四一―五四七一番

清元協会
港区芝四―一六―二―E二四〇一
電話三四五二―四〇五九番

財団法人 古曲会
新宿区西新宿六―十二―三〇 芸能花伝舎
電話三三四八―五〇二一番

新内協会
新宿区神楽坂六―二十七
電話三二六〇―一八〇四番

常磐津協会
世田谷区岡本一―三十二―八
電話二七〇七―三七六三番

社団法人 長唄協会
中央区銀座二―十一―十九―四
電話三五四二―六五六四番

社団法人 日本三曲協会
港区赤坂二―十五―十二―四〇三
電話三五八五―九九一六番

（五十音順）

助成

東京都

邦楽振興基金

（㈳CPRA（実演家著作隣接権センター））

「二〇〇九都民芸術フェスティバル」の開催に寄せて

東京都知事　石原　慎太郎

「都民芸術フェスティバル」は、優れた舞台芸術に親しむ機会を広く都民に提供するとともに、東京における芸術文化活動の振興を図るために開催するもので、今年で四十一回目を迎えます。

東京の春を彩る行事として本フェスティバルを心待ちにしているファンも多く、今年は一月八日から三月二十九日まで、都内各地で多彩な舞台公演が開催されます。ひとりでも多くの皆様に、各会場で繰り広げられる多彩な舞台芸術を存分に堪能していただきたいと思います。

東京には、伝統と最先端が織りなす魅力的な文化があります。

現在、東京都で取り組んでいる二〇一六年オリンピックの招致活動のなかでも様々な機会をとらえ東京の文化を発信していきます。

こうしたイベントを通じて、都民の皆様が優れた東京の芸術文化に親しむとともに、オリンピック招致機運がさらに盛り上がっていくことを期待します。

結びに、本フェスティバルに参加された皆様のご尽力に感謝するとともに、本公演のご成功と今後益々のご発展を祈念いたします。

財団法人東京都歴史文化財団
理事長　氏家　齊一郎

今年で四十一回目を数えます「都民芸術フェスティバル」は、今回から東京都と財団法人東京都歴史文化財団が共同で開催してまいります。

当財団は、十一の都立文化施設を管理運営するとともに、さまざまな文化事業の実施・文化活動への支援助成を通じ、東京の歴史を継承し、文化のさらなる振興と発展に努めております。

本フェスティバルは、都民の皆様に東京で繰り広げられる優れた舞台芸術に親しんでいただく格好の機会でございます。是非とも、薫り高き東京の文化をご堪能いただきたいと存じます。

本公演が盛大に開催されますことを心より祈念いたします。

２００９都民芸術フェスティバル参加公演一覧

TOKYO●2016 APPLICATION CITY
オリンピックを日本に,2016年!

＊□の公演は無料です。(要事前申込み)
＊鑑賞券の購入方法等詳細は、東京芸術劇場ホームページ(http://www.geigeki.jp)をご覧いただくか主催団体等にお問い合わせください。

	演目	開催日	開演時間	会場	主催団体
オペラ	藤原歌劇団公演「ラ・ジョコンダ」全4幕 (イタリア語上演・日本語字幕付)	1/31・2/1 2/2	15:00 18:30	東京文化会館　大ホール	(財)日本オペラ振興会 03－6407－4333
	東京室内歌劇場公演 「ル・グラン・マカーブル－大いなる死－」日本初演 (ドイツ語上演・日本語字幕付)	2/7 2/8	18:00 15:00	新国立劇場　中劇場	東京室内歌劇場 03－5642－2267
	東京二期会オペラ劇場 「ラ・トラヴィアータ」全3幕(イタリア語上演・日本語字幕付)	2/12・13 2/14・15	18:30 14:00	東京文化会館　大ホール	(財)東京二期会 03－3796－1831
オーケストラ	東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団	1/31	18:00	東京芸術劇場　大ホール	(社)日本演奏連盟 03－3437－6837
	読売日本交響楽団	2/4	19:00		
	東京都交響楽団	2/18	19:00		
	NHK交響楽団	2/27	19:00		
	東京交響楽団	3/4	19:00		
	日本フィルハーモニー交響楽団	3/12	19:00		
	東京フィルハーモニー交響楽団	3/22	14:00		
	新日本フィルハーモニー交響楽団	3/26	19:00		
室内楽	篠崎史紀「室内楽の夕べ」	1/28	19:00	東京文化会館　小ホール	(社)日本演奏連盟 03－3437－6837
	清水和音「ピアノ三重奏の夕べ」	3/5	19:00		
演劇	「ハンナのかばん」	2/18	19:00	銅鑼アトリエ	(有)劇団銅鑼 03－3937－1101
		2/19・20	19:30		
		2/21・22	14:30		
		3/12・13	19:30	東京芸術劇場　小ホール2	
		3/14・15	14:30		
		3/22	15:00 18:00	新宿区立牛込箪笥地域センター 5F多目的ホール	
		3/27	19:00	三鷹市芸術文化センター 星のホール	
		3/29	14:00	東久留米市立西部地域センター　多目的ホール	
ダンス	21世紀日中舞台芸術交流プロジェクト 「十人の夜」	3/4・5・6	19:30	森下スタジオ　Cスタジオ	R PRODUCTION 050－5539－5159
		3/7	14:00		
		3/8	14:00 18:30		
	東京バレエ団公演 「眠れる森の美女」全3幕・プロローグ付	1/8・9	18:30	東京文化会館　大ホール	(財)日本舞台芸術振興会 03－3791－8888
		1/10	15:00		
	牧阿佐美バレエ団公演 「リーズの結婚～ラ・フィーユ・マル・ガルデ～」全幕	3/7	13:00 17:30	ゆうぽうとホール	牧阿佐美バレエ団 03－3360－8251
		3/8	14:30		
	日本バレエ協会公演 「眠れる森の美女」全3幕・プロローグ付	3/25・26・27	18:30	ゆうぽうとホール	(社)日本バレエ協会 03－5437－0372
	内田香振付「Evocation」蘭このみ振付「ボレロ」 武元賀寿子振付「LIFE SCRAMBLED」	2/14 2/15	19:00 15:00	新国立劇場　中劇場	(社)現代舞踊協会 03－5457－7731
邦楽	第39回　邦楽演奏会 義太夫・清元・古曲(一中節、河東節) 新内・常磐津・長唄・三曲	3/1	12:00 16:00	国立劇場　小劇場	邦楽連合会 03－3348－5021
舞踊	第52回　日本舞踊協会公演	2/14・15・16	11:00 16:00	国立劇場　大劇場	(社)日本舞踊協会 03－3533－6455
能	第49回　式能	2/15	10:00 15:00	国立能楽堂 ※1・2部入替制、通し券あり	(社)能楽協会 03－5925－3871
	「君にもできる能の世界～体験と観賞～」 (鑑賞：狂言(大蔵流)「柿山伏」　能(金春流)「葵上」)	1/11	15:00	町田市民ホール ＊体験は13時開始	
都民寄席	「浪曲の会」澤孝子、国本武春　ほか	2/22	14:00	江戸東京博物館ホール	都民寄席実行委員会 03－5909－3081
	桂歌丸、三遊亭圓丈　ほか	2/26	18:30	羽村市生涯学習センター「ゆとろぎ」	
	鈴々舎馬風、春風亭小柳枝　ほか	3/7	13:30	八王子市民会館　大ホール	
	三遊亭金馬、昔昔亭桃太郎　ほか	3/8	14:00	日野市民会館　大ホール	
	三遊亭小遊三、古今亭志ん五　ほか	3/23	18:30	町田市民ホール	
芸能	第40回東京都民俗芸能大会 「多摩のちびっ子芸能大集合」	2/7・8	13:00	昭島市民会館　大ホール	東京都民俗芸能大会実行委員会 03－5211－7366
	「東京マラソン2009　祝・粋・祓・競」 ＊鑑賞無料・鑑賞自由	3/19・20・21・22	東京ビッグサイト		

＊やむを得ない事情により、プログラムが変更となる場合があります。

第一部　番　組（十二時開演）

一、三曲　長崎十二景

箏Ⅰ	宮本雅都貴	門田雅楽康寿	田村雅釉徽
箏Ⅱ	中島雅楽彩智	奥野雅菖	彦坂雅紀恵美
三弦Ⅰ	高畑雅紫登	釣谷雅楽仁	
三弦Ⅱ	大久保雅礼	吉田雅鳳	砂山雅真
十七弦Ⅰ	高田雅楽史	瀬志本雅楽華	宮後雅紫都
十七弦Ⅱ	宮越雅虹	佐藤雅女	久松雅紗恵
尺八	角井雅楽伎	野沢雅世	唯是雅枝
	川村泰山	山本真山	田中雅紀美
	安島瑶山	菊地邦良	田辺洌山
胡弓	奥田雅楽之一	友常邦聖	

二、新内　明烏夢泡雪（あけがらすゆめのあわゆき）

―浦里部屋（うらざとへや）―

浄瑠璃　新内光千之

三味線　新内仲三郎
上調子　新内仲之介

三、長唄　外記猿（げきざる）

唄　芳村伊十衛
同　杵屋佐臣
同　芳村伊四紹

三味線　日吉小暎
同　東音　岩田喜美子
上調子　日吉小静

四、常磐津　恩愛瞶関守（おんあいひとめのせきもり）（宗清）（むねきよ）

浄瑠璃　常磐津初勢太夫
同　常磐津和洸太夫
同　常磐津松希太夫
同　常磐津初應太夫

三味線　常磐津文字蔵
同　常磐津齋蔵
上調子　岸沢式明

五、

河東節　廓八景（くるわはっけい）

浄瑠璃　山彦ちか子
同　山彦幸子
同　山彦幸代
同　山彦響子
同　山彦升子

三味線　山彦東子
同　山彦佳子
同　山彦とく子
同　山彦えい子
上調子　山彦朋子

六、

清元　幻（まぼろし）椀久（わんきゅう）

浄瑠璃　清元寿美太夫
同　清元美寿太夫
同　清元美好太夫
同　清元美貴太夫

三味線　清元榮三
同　清元栄吉
上調子　清元雄二朗

七、

義太夫　新版歌祭文（しんばんうたざいもん）

—野崎村—

久作　竹本越孝
お光　竹本綾之助
お染　竹本土佐子
久松　竹本土佐恵
母　竹本越京

三味線　鶴澤寛也
ツレ弾　鶴澤駒治
同　鶴澤三寿々
同　鶴澤津賀榮
同　鶴澤賀寿
同　鶴澤津賀花

（終演予定　午後三時三十分）

第二部　番　組（午後四時開演）

一、三曲　岡康砧（おかやすぎぬた）

箏第一替手　山登松和
箏本手　佐野和代　佐藤登貴代　岸登喜近　高木登誉栄
箏本手　大久保登美乃　緑川登和玲　阿部登菜義　燕佐雅治
箏第二替手　大古登和希
三弦　大島登誉乃　勝沼登根理　波々伯部登貴寿　竹内佐登和

二、常磐津　夜討曽我（よううちそが）

浄瑠璃　常磐津文字由昆　三味線　常磐津文字東久
同　常磐津美奈衛　同　常磐津孝野
同　常磐津文字満咲　上調子　常磐津文字東勢

三、一中節　お夏笠物狂（なつかさものぐるい）

浄瑠璃　都乙中　三味線　都一中
同　都了中　同　都楽中

四、新内　東海道中膝栗毛（とうかいどうちゅうひざくりげ）

—市子口寄せ（いちこくちよ）—

浄瑠璃　鶴賀岳代寿　三味線　鶴賀岳代寿郎
上調子　鶴賀岳代志寿

五、清元 〆能色相図（しめろやれいろのかけごえ）（神田祭）

浄瑠璃 清元延栄一
同 清元延初磨
同 清元延明寿
同 清元延清恵
三味線 清元延八寿美
同 清元延美葉
同 清元延志寿佳
上調子 清元延知寿

六、義太夫 壺坂観音霊験記（つぼさかかんのんれいげんき）—山の段—

浄瑠璃 竹本駒之助
三味線 鶴澤津賀寿
ツレ弾 鶴澤寛也

七、長唄 綱館之段（つなやかたのだん）—曲舞入り—

唄 東音 宮田哲男
同 東音 藤倉琇益
同 東音 西垣和彦
同 東音 谷口之彦
同 東音 皆川康司
三味線 今藤政太郎
同 今藤美治郎
同 松永忠一郎
同 今藤政十郎
上調子 東音 宮田由多加
囃子 笛 福原徹彦
脇鼓 仙波大明
立鼓 仙波宏祐
大鼓 仙波元章
太鼓 仙波和典

（終演予定 午後七時三十分）

○一部の出演者に変更のある場合はお許し願います。

曲目解説（演奏順）

（解説　竹内道敬）

第一部

一、長崎十二景

唯是震一作曲。一九六七年の夏、京都で開催されていた竹久夢二の展覧会で、「長崎十二景」という題の水彩画を見て感銘を受け、その印象を組曲にまとめた作品。今日は時間の都合で全十二景のうちの八景を、もととは順序を変えて演奏される。

▽第一景「十字架」：飾りっけのない部屋。楕円形の壁掛け風なキリストの十字架が吊られ、長椅子の端にはロザリオを首にした花魁（おいらん）が敬虔に祈る。尺八、箏、十七絃によるミクソリデイア旋法を用いた音楽。

▽第二景「出島」：想い出にふける中年の女性像。出島の港と人家を背景とし、岸づたいに聖衣をまとう修道僧たちが手を合わせ、静かに歩いている。八分の六拍子で出島をうたう尺八が、波と背景を表現する箏を伴って奏される。

▽第三景「ネクタイ」：戸外で別れを惜しむロシア人風の老紳士と和装の洋妾（らしゃめん）らしい女の絵。ステッキを力なく右手にして山高帽を少し前高にかぶり、物憂げな顔でたたずむ紳士。いたわるようにネクタイの結び目に両手をかける女。ロシアの唄が流れている。尺八、箏、十七弦（あんさん）による合奏。

▽第四景「阿片窟」：「長春楼」と掲げられた板看板。入口に人待ち顔に立つ中国服の女「玖瑰露」とラベルの付いた酒壺がある。柔らかいベッドに横たわる裸婦たちも見える。

尺八、胡弓、箏、十七弦で奏される。

▽第五景「灯籠流し」：旧の盂蘭盆の十五日の夜に精霊送りがある。町々から繰り出される精霊舟に、多くの灯籠が飾られて、夜の町は光りの海となり輝く。浴衣がけで左手に子の手をとり、右手に団扇を持ちながら眺め入るやさしい女のうしろ姿。三弦と尺八、箏、十七弦により情景を作る。

▽第六景「化粧台」：港の見える洋室。化粧台を前にして、髪の乱れを気にするなまめかしい半裸の女。それを眺める軍人風な外国の男。三弦の二重奏。

▽第七景「凧揚げ」：長崎名物の凧揚げは四月の風物詩である。春風に挑戦しながら、大空にひるがえる凧揚げは壮観である。尺八のラッパ吹き、箏の絃を打ち鳴らす音は、凧のうなりの擬音である。勇壮で軽快な描写曲。

▽第八景「浦上天主堂」：夢二の描いた浦上天主堂は原爆で消失した。信仰深い村娘の像は両頬赤く、白頭巾をかぶり、首にロザリオして、左腕に水玉模様の風呂敷包みを抱えている。山のふもとの起伏する田園の向こうに天主堂が見える。えんえんと続く丘の道には、老若男女がゆっくりと列をなして登って行く。礼拝堂の鐘の響きが、この山裾に清らかに聴こえてくるように想える。やがてミサが始まるのだろう。この組曲のフィナーレであり、静かな聖歌を全楽器と鐘によって演奏する。

二、明烏夢泡雪　―浦里部屋―

初代鶴賀若狭掾の作詞・作曲。安永元年（一七七二）にできたという。ふつう上下に分

けて上を「浦里部屋」、下を「雪責め」という。今日は「浦里部屋」が演奏される。

春日屋の時次郎は、山名屋の浦里と馴染みを重ね、借金で首が回らなくなり、死のうと覚悟をきめたが、未練があってここ浦里の部屋に隠れている。しかし怪しんだ遣手のかやに見つけられ、浦里は亭主に引き立てられ、時次郎は若い衆に叩かれた上、表へ放り出されてしまうまで。このあとが「雪責め」で、雪の降る山名屋の中庭になり、庭の古木にかむろのみどりとともに縛られた浦里が、亭主に折檻されるが、やがて時次郎が助けに来てくれる。しかしこれはすべて夢の中の出来ごとだとして、題名にも夢の字を使っている。

それというのも、明和六年（一七六九）に実際にあった心中事件をモデルにしているからで、幕府の禁令に触れるのを逃れるために名前を変えたのだが、それでも念を入れて遠慮したものである。実際の事件は幕府の御賄方伊藤伊左衛門の倅と、新吉原の遊女美よし野が心中したもの。

この作品は「蘭蝶」（若木仇名草）、「伊太八」（帰咲名残の命毛）と並ぶ新内節の代表曲で、全曲を演奏するには一時間半以上もかかる。なおこの影響は大きかったが、歌舞伎、義太夫、常磐津、清元に取り上げられるのは江戸時代も末近くになってからである。

三、外記猿

正式には「外記節猿」。作詞者未詳。四世杵屋三郎助（のち十代目六左衛門）が文政七年（一八二四）七月に作曲したもの。作曲者が申歳生れであり、文政七年が申歳だったので、それにちなんで作曲したもらしい。

外記節というのは古い浄瑠璃で、薩摩外記直政が語り始めたもの。十七世紀終りごろに

江戸で流行したが、やがて衰退して、現在では「外記ガカリ」という三味線の手だけが伝承されている。十代目六左衛門はその衰退した外記節を復活しようと、通称「外記節三部作」といわれる「傀儡師（かいらいし）」「石橋（しゃっきょう）」とこの「猿」を作曲したが、どこまで外記節の味が残っているのかわからない。それでも三味線の前弾き、初めの「泊まりを急ぐ…」、真ん中あたりの「松の葉越しの…」、おしまいの「地より泉が…」のあたりが外記節らしいと言える。

内容はお屋敷に呼ばれた猿回しが、めでたいことを述べ、有名なお染久松の物語をきかせるというもの。そのうち「夜さの泊まり…」は古い流行り歌で、実際の猿回しも唄ったもの。二上りの「皐月五月雨…」も古くからある飛騨節。「一の弊立て…」は新築祝いなどで唄われる祝儀唄。

四、恩愛瞶関守（宗清）

奈河本輔作詞、五世岸澤式佐作曲。文政十一年（一八二八）十一月、江戸市村座の「貢之雪源氏贔屓」の一番目三立目で初演。近松門左衛門の「源氏烏帽子折」の二段目「宗清館の段」を翻案したもの。

常盤御前は近衛院の后九条院呈子の雑仕で、宮中第一の美女であった。十六歳のとき源義朝に嫁して、三人の男子をもうけたが、平治の乱（一一五九）の後、義朝の遺児探索の手を逃れて、今若（七歳）、乙若（五歳）、牛若（二歳）をつれていったんは清水寺に行き、さらに伯父を頼って大和の国へ逃れるが、母が捕えられたときいて出頭し、子供のために清盛になびいたという。その途中を主題にしたもの。

今若、乙若を連れ、懐には牛若を抱いて、常盤御前がここ木幡のあたりの宗清の館を通りかかる。雪の中、難儀する姿が目立つので、番卒にとがめられる。さては源氏のゆかりのものと怪しまれるが、重盛の制札の心をくみ取った宗清は、常盤御前に女の操を破り、清盛に従えば子供の命も助かると語りかける。常盤御前は悩むが、子供の命には代えられない。宗清の説得と、子供の命を心配する常盤御前の心の動きが微妙であり、またその決断と結果が思いがけない。しかしこれもすべて、鞍馬山で牛若丸が見た夢の場面という設定で、このあとは長唄「鞍馬山」が演奏された。

五、廓八景

二代目劇神仙こと宝田寿莱（長島寿阿弥）作詞、五世山彦河良作曲。弘化元年（一八四四）開曲。五世河良はこの年初めてタテ三味線となった。

江戸時代には中国の瀟湘八景がもてはやされ、それを日本に移した近江八景が流行してから浮世絵、舞踊などに「……八景」というのが盛んに作られた。音楽では山田流箏曲に「近江八景」があり、一中節に「吉原八景」「品川八景」、長唄には「吾妻八景」「巽八景」、常磐津の「廓八景」、荻江の「深川八景」などで、東明にも「向島八景」がある。それらの基本は中国の瀟湘八景で、平沙落雁、遠浦帰帆、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月瀟湘夜雨、煙寺晩鐘、漁村夕照をいう。

また江戸時代の後半には、なにかというと吉原に関係付けることが流行していて、詞章には吉原を賛美するものが多い。この河東節でも吉原の風俗、習慣その他を取り込んで、八景を巧みに配置し、さらにこれを四季の順にまとめたところに特色がある。内容には今

ではわからないこともあるが、それらを越えて幕末の雰囲気を楽しみたい。

六、幻椀久

岡村柿紅作詞、五世清元延寿太夫作曲。大正十四年（一九二五）三月、新橋演舞場の落成祝賀会で初演された。歌舞伎では昭和三年六月に六代目尾上菊五郎が踊ってからよく知られるようになり、現在でも人気の高い演目となっている。

椀久とは延宝（一六七三〜八〇）のころ、大坂御堂筋の豪商椀屋久右衛門（久兵衛とも）のことで、新町の遊女松山に馴染み、豪遊した末に座敷牢に入れられたが、後に発狂して鉢叩きという門付けになってさまよい歩いたという。この実説に基づいた舞踊作品が数多く作られ、義太夫節、一中節、常磐津、長唄などで「椀久もの」と言われている。男性の狂乱もののの代表的な主人公。

清元のこの曲はもっとも新しい作品で、狂乱した椀久が、鉢叩きの姿でさまよっているところから。松の木の根もとにたどり着くと、恋しい松山の姿があらわれる。これは椀久の見た幻。そこに同じく幻の菊市があらわれ、酒盛りになり、にぎやかに昔を思い出しての騒ぎになるが、やがてその幻も消え、椀久は一人疲れ果てて寝込んでしまうまで。いかにも大正時代らしい雰囲気でまとめた作品であると同時に、名作として人気が高い。

七、新版歌祭文 ― 野崎村 ―

安永九年（一七八〇）九月、大坂竹本座で初演。近松半二作。油屋の丁稚久松と、主人の娘お染とが心中したのは宝永七年（一七一〇）のこと。評判になり多くの作品が書かれたが、それらを集大成したのがこの作品。

和泉国石津の家臣で千五百石取の相良丈太夫は、主家の重宝吉光の刀を紛失したために切腹。六歳の遺児久松は乳母が引き取り、野崎村の兄久作に預ける。成長した久松は十歳の時に大坂の油屋に奉公しているが、そこで娘のお染と恋に落ちたというのがこれまでの伏線。

久松はお染としのび逢っている時に、屋敷方から受け取った金を騙し取られたため、急に野崎村の久作の家に帰ってくる。久松はお染に山家屋へ嫁入りするように書置をしていた。そこからが今日演奏される。久作はかねてから連れ子のお光を久松と祝言させるつもりだったので、お光は嬉しくてたまらない（ここは省略）。お光が納戸へ入ったあと、野崎参りにかこつけてお染が訪ねてきて恨みを言う。久作の意見で二人は縁を切ると言ったがそれは表向きで、心中する覚悟と悟ったお光は髪を切り、白無垢姿になって尼となる。久松と夫婦になることをあきらめたのである。それらをきいていたお染の母の計らいで、二人は船と駕籠で別れ別れに大坂へ帰って行く。段切れの三味線はよく知られた旋律で、ツレ弾きできいていただく。これは歌謡曲「野崎小唄」（昭和十年）にも使われているので、義太夫を知らない人にもお馴染みのはず。

第二部

一、岡康砧

この曲の成立についてはいろいろな説があって、はっきりしない。ひとつは徳川家康が岡崎でこの曲をきいて、岡崎の「岡」と家康の「康」とを合わせて「岡康」という名を与えたというもの。これにも胡弓の演奏をきいたというのと、三味線の演奏をきいたというのと二つある。それから現在の長唄の岡安家が生れたという。もうひとつは『杵屋系譜』に二代目岡安源助という者が作ったというもの。

砧というのは、衣板（きぬいた）の略で、織りあげた布地をやわらかくしたり、光沢を出したりするために、木または石の台の上に置いて打つこと、またはその台のこと。古くからおこなわれていて、単調なリズムと冬の風物詩として知られていた。能に「砧」があり、そこでは長年帰国しない夫を慕う妻が、砧を打って心を慰める。とくに地歌、箏曲では題材として多くの「砧もの」が作られ、胡弓や尺八曲にも及んでいる。

今日演奏されるのは文政十一年（一八二八）以前にできていたらしいが、明治以後に完成されたもの。短い前歌のあと長い手事（楽器だけの演奏）があり、おしまいに短い後歌が付く。この手事部分に特色があり、砧を打つリズムを基本にして、さまざまな変化で冬の寒さと寂しさ、その中での紅葉狩の楽しさをあらわしている。

二、夜討曽我

成立年未詳。作詞・作曲者未詳。ただし四世常磐津文字太夫（豊後大掾）の時代、およそ天保末年から嘉永年間（一八四〇～五〇ごろ）に作られたものらしい。

伊豆の豪族伊東祐泰は、所領争いから一門の工藤祐経のために暗殺された。その子で当時五歳の兄一万、三歳の弟箱王は、母の再婚にしたがって曽我太郎祐信に養われる。二人は元服して兄は十郎祐成、弟は五郎時致となり、父の死後十八年目の建久四年（一一九三）五月二十八日の夜に、富士の裾野の狩場で父の仇を討ったが、十郎はその場で討死、弟は捕えられて斬られた。この曽我兄弟の仇討は、伊賀の仇討、赤穂浪士の仇討とともに日本の三大仇討とされているが、場所が関東に近いことと、年月の長いことなどから、江戸歌舞伎ではとくに人気が長く続いて、多くの「曽我もの」が作られた。この曲もそのうちの一つ。

同名の作品は能と筑前琵琶にもあるが、それらは曽我兄弟が討入する場面を主題にしているのと違って、本作では討入直前に大磯の虎と化粧坂の少将が登場して、討入の手助けをするところが新しい趣向。そして仇討の成功と無事を祈って退場した後、勇ましい立ち回りになって終る。

三、お夏笠物狂

正徳五年（一七一五）十一月、江戸市村座の顔見世で初演された。初世都一中が初めての江戸下りで大当たりを取った記念すべき作品。お夏清十郎の物語は数多くあるが、直接

には近松門左衛門の「五十年忌歌念仏」下の巻の「おなつ笠物狂」をほとんどそのまま脚色している。

姫路の米問屋但馬屋の手代清十郎には、許嫁のおさんがあるのだが、主人の娘お夏と恋仲である。ある日手代仲間の勘十郎の悪企みのために、但馬屋を追い出されてしまう。その夜清十郎は勘十郎の悪企みを知って、勘十郎を殺そうとして、間違って同じ手代仲間の源十郎を殺してしまう。清十郎は逃げ出し、お夏は狂乱して清十郎の跡を追う。

そこで清十郎の妹のおしゅんと、許嫁のおさんが、歌比丘尼の姿になり、清十郎を探す旅に出て、途中でお夏に出合う場面がこの一中節。

初めの「夜さ来いと…」は当時の流行り唄。この唄でおさんとおしゅんが出てくる。続いて狂乱したお夏が出て来ての唄で「向かい通るは…」も同じく当時の流行り唄。三人がからんでの場面にも「小舟作りて…」も当時の流行り唄。おしまいはお夏の狂うさまを述べて終る。いわゆる「お夏清十郎もの」になくてはならない流行り唄を取り入れて、見事にまとめてあり、名作として人気が高い。なお時間の都合で一部省略してある。

四、東海道中膝栗毛　―市子口寄せ―

富士松魯中作詞・作曲。自筆本に嘉永三年（一八五〇）八月完成とある。原作は十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』。それを脚色した魯中の作品「弥次喜多三段」の内のひとつ。他は「赤坂並木」と「組討ち」。

富士川まできた弥次郎兵衛と喜多八は、川止めになったので、宿で寝て待つしかない。ふと見ると隣りの部屋には女性がいる。これがなんと瞽女と巫女（市子）たちである。大

騒ぎの末に仲良くなり、酒を飲み瞽女に唄わせ、巫女に口寄せ（死者の霊を呼び出す）をしてもらうことになる。呼び出されたのは弥次郎兵衛の死んだ神さんで、貧しい庶民の夫婦の様子が楽しくもまた悲しく語られる。

新内節中興の祖と言われた魯中が、新境地を開いた傑作で人気の高い曲。時間の都合で一部を省略して語られるが、途中に入れごと（アドリブ）が予定されている。戦前にはこれをかなり長く語るのが、演奏家の腕の見せどころであり、また聴くほうの楽しみでもあったという。

五、〆能色相図（神田祭）

三升屋二三治作詞、初世清元齋兵衛作曲。天保十年（一八三九）九月、江戸河原崎座初演。この三升屋二三治は二世清元栄寿太夫の父。しばらく歌舞伎の舞台から遠ざかっていた二世延寿太夫が、久しぶりの出演というので、大当たりを取ったと伝える。

江戸のお祭では、俗に「天下祭」と言われたのが神田祭と山王祭で、一年おきに本祭を行った。それを直接ではなく、祭で人気者の鳶の者と、それに惚れている芸者のやりとりを主題にしたところに特色がある。もっとも賑やかで盛大だった神田祭の風情を伝える名作。というのも、実際の神田祭があまりにも派手になり過ぎたので、翌年から町奉行から縮小するように言われたからである。清元にはほかに祭礼を主題にした「三社祭」「お祭」があるが、この「神田祭」がもっとも新しい最後の曲で、これ以後には祭礼の曲は作られていない。

現在の神田祭は五月だが、当時の神田祭は九月に行われていたので、九月初演というのは実際と同じ月であった。「一歳を」というのが今年本祭に当たったことを指している。

もとの「〆能色相図」は上下二段になっていて、上の段は二人の武士と傾城の踊り。それから引きぬいて鳶の者と女の手古舞のやりとりになった。終りは木遣りになって賑やかに派手になって終る。現在ではわかりにくい言葉があるが、もっとも盛んだった神田祭の雰囲気と風情を伝えてくれる。理屈抜きに楽しみたい名曲。

六、壺坂観音霊験記 ― 山の段 ―

明治十一年（一八七八）ごろ、福地桜痴か伊東橋塘が壺坂寺の由来記によって書いたのを、二世豊澤団平の妻加古千賀女が加筆し、団平が作曲し、明治十二年に大阪大江橋席で上演。さらに作曲し直して明治二十年に大阪の稲荷彦六座で上演して大当たりを取った。これが現在の曲と伝える。壺坂寺は西国三十三所の第六番の札所で、古くから眼病に霊験があると伝える。

座頭の沢市は、壺坂寺のほとり土佐町に、女房のお里と二人で暮らしている。沢市は箏や三味線を教え、お里は近所の洗濯や針仕事でようやく生活をしている。沢市は疱瘡で盲目になったが、なんの不足もない。気になるのはお里が毎晩遅くに出かけること。問いただしてみると、沢市の目が治るように壺坂の観音様へ願かけをしているとのこと。それを聞いて沢市は、自分もお参りをしたいと言って、夫婦そろって寺に出かける（ここまでが前の場面で「沢市内」）。寺へ着いた沢市は、三日間断食して願かけをすると言ってお里を帰し、治る見込みもないのに祈願するより、お里にこれ以上の苦労をかけまいと、谷底へ身を投げてしまう。ここからが今日の演奏になる。

明治維新を迎え、文明開化の時代になってこのような作品が歓迎されたのは、それまでの義太夫作品がほとんど悲劇中心だったので、めでたく終るところが喜ばれた原因であろう。なお同じ年にやはりめでたく終る「良弁杉由来」が初演されている。

七、綱館之段 ― 曲舞入り ―

正式には「渡辺綱館の段」。作詞者未詳。三世杵屋勘五郎作曲。明治二年（一八六九）に開曲。これはもと寛保元年（一七四一）七月、江戸中村座で初演された「兵四阿屋造」を復活したもの。ただし「伯母を敬い」から二上りの「山めぐり」は「曲舞の段」で、この文句は安永元年（一七七二）正月、江戸中村座で初演された「雲井里言葉」から取り入れたもので、明治中期に加えられたと伝える。

羅生門で鬼の腕を切り取った渡辺綱は、安倍晴明のすすめにしたがって、七日の物忌みをしている。そこへ故郷の津の国渡辺の里から、はるばると伯母が訪ねてくる。一度は物忌み中と断ったが、門の外でかきくどくので、やむなく内へ入れる。酒を飲み、曲舞を舞った後、鬼の腕を見せてくれというので唐櫃の蓋を取って見せると、やがて鬼の正体をあらわして腕を取り戻し、茨木童子と名乗って消え失せる。

大薩摩の代表曲で、大薩摩の手が随所に使用されている。加えて曲の構成と段取りが見事でわかりやすく、それに作曲が実によくできている。作曲者も会心の作と言っていたとか。なお舞踊曲の「茨木」は、三世杵屋正治郎がこの「綱館」をもとにしたもの。

▽歌詞の中に今日の人権意識に照らして一部不適切な語句がありますが、古典の作品をそのまま演奏いたしますため、そのままにしたことをお許し願います。

メモ